様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　25 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22830116
研究課題名（和文）　ヴェトナム戦争報道をめぐる比較ジャーナリスト研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study of the journalist in the Vietnam War.

研究代表者
岩間　優希（Iwama Yuki）
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：00584096

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本のヴェトナム戦争報道を、複数のジャーナリストの報道に着目しながら比較研究を行った。その結果、報道の初期・中期・後期で見られた報道の違いには、実際の戦況だけでなく、ジャーナリストの戦争体験・占領体験や先行する報道を乗り越えようとする意思が反映されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study researched the reports on the Vietnam War in Japanese mass media by a comparative study of the several journalists. As a result, it presented that some differences in the beginning, middle and latter term of report was reflected not only actual war situation but also each journalist’s war or occupied experience in the past and desire to reported better than their predecessors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	520,000	156,000	676,000
2011 年度	430,000	129,000	559,000
年度			
年度			
年度			
総　計	950,000	285,000	1,235,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：ジャーナリズム、マスメディア、戦後史、ヴェトナム戦争

１．研究開始当初の背景

ヴェトナム戦争は、メディアが戦争に反対する論調を展開した史上初の戦争であり、戦後日本人が初めて「他者の戦争」を主体的に報道した戦争でもあった。にもかかわらず、その重要性に反して日本のヴェトナム報道はこれまで学術的な研究の対象とはされてこず、元ジャーナリストによる回顧録やイデオロギー的な評論に終始していた。

研究申請時、報告者は日本のヴェトナム報道をその発端から分析し、『初期ヴェトナム戦争と日本のジャーナリズム』（博士学位請求論文）として成果をまとめていた。同研究では、日本のヴェトナム報道はジャーナリストたちの戦争体験を色濃く反映していたとともに、アメリカ側からの一方的な報道に対して、「日本人の目」でヴェトナム戦争を見ようとするナショナリスティックな側面を持って始まったことを実証した。ただし、それらの研究では対象期間を 1965～1967 年までに限定し、「1968 年」の戦後ラディカリズムに象徴される 68 年以降の報道は扱わなかった。すでにヴェトナム報道が盛んになされ

ていた1968年以降のジャーナリストたちは、それ以前の日本人のヴェトナム報道に接しており、ナショナリスティックなモチベーションとは別の背景もまた存在すると考えられた。報告者はこうした 1968 年以降のヴェトナム報道の動向・背景を明らかにすべく、本研究を着手するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下を明らかにすることであった。

(1)個々のジャーナリストのヴェトナム戦争観
本研究で中心となったのは、ジャーナリストによるルポルタージュの内容分析である。個々のジャーナリストがどのようにしてヴェトナム戦争に接し、報じたか、彼らの書いた新聞記事、書籍、雑誌記事などの言説分析によって明らかにした。その際、ヴェトナム戦争観だけでなく、なぜそのように認識するに至ったかの経緯を、彼らの個人的経歴、戦争体験、所属メディア、取材時期・場所などの諸事項から分析した。

(2)先行するジャーナリストへの評価
ジャーナリストたちが報道を行う上では、自分たち以前のジャーナリストに対する評価が重要になってくる。現地ヴェトナムに赴く前に持っていた先入観が、その後の認識や報道の傾向性に影響を与えるからである。従って本研究では、ジャーナリストたちが先行世代の報道をどう評価しているか、それらの解釈に「ズレ」がなかったかを多角的に検証した。

(3)1968年から1972年までのラディカリズムとの連関
ジャーナリストたちの書いたものと日本の知的・社会的状況との連関を考察した。本多勝一や石川文洋といったジャーナリストの報道が人気を博した 1968 年は、反権威的な潮流が世界的に高まった時期と一致している。「1968 年的」な状況がヴェトナム報道の傾向とどのようなつながりがあるのか、(1)で検証したジャーナリストの戦争観との連関を明らかにした。

３．研究の方法

(1)時期区分
本研究では、それまでに研究した 1965～1967 年のヴェトナム報道を「初期」とし、1968～1972 年を「中期」、1973～1975 年までを「後期」として区分を行った。そして、平成 22 年度に「中期」、平成 23 年度に「後期」の研究を行った。
この三区分を行う理由は、第一に、実際の戦況の推移に即しているためである。1968 年に南ヴェトナム全土で解放戦線が一斉蜂起したことにより、戦争の情勢自体が大きく変化した。この攻勢での米軍の損失はアメリカ国内での反戦運動が盛んにさせ、1973 年の和平協定と米軍完全撤退へとつながっていくことになるのである。第二に、1968 年は世界的な規模での思想転換、左翼運動の高まり、若者のラディカル化などが同時多発的に発生し、先行世代への批判、またはある種の世代交代が行われた時期である。日本でこれは 1968 年の全共闘の台頭に始まり、1972 年の浅間山荘事件、沖縄返還にて一定の区切りを経た。そして第三に、人気を博したスター記者の世代交代がほぼこのスパンで行われていることである。まずは時期区分として以上の基軸を用いた。

(2)具体的方法

本研究では、文献資料の収集・分析と、聞き取り調査の二つの方法で研究を進めた。

① ポルタージュ分析
個々のジャーナリストが新聞・雑誌記事、書籍等に執筆したヴェトナム・ルポの言説分析を行った。その際、実際の戦況の推移だけでなく取材対象、社会的背景、個人的属性等との連関から分析した。また、先行するジャーナリストの報道をどう評価しているかを検証した。

② 聞き取り調査
本研究では、上にあげた代表的ジャーナリスト、およびその関係者を中心に聞き取り調査を行った。代表的ジャーナリストがすでに亡くなっている場合は、その関係者や、ヴェトナムで同時期に特派員をしていたジャーナリストへの調査を行った。この他、ヴェトナム戦争についての発言が多くある知識人や政治家、反戦運動を行った人物へのインタビューも実施した。

４．研究成果

平成 22 年度には、本研究でいうところの中期に活躍したジャーナリストとして本多勝一と石川文洋のヴェトナム報道を中心に分析した。両者が新聞や雑誌に書いた膨大な数の書籍、雑誌・新聞等の記事を収集するとともに、それらを 1968～1972 年の社会的状況に照らし検討した。
1968～1972 年は、思想のラディカリズムが世界中で高まっていた時期である。そのよう

な時代にあって彼らの報道は、「ヴェトナム反戦」と「北ヴェトナム・解放戦線支持」の潮流と相まって日本国内のみならず関連国に重要なインパクトをもたらした。それまで主流であったアメリカ側からのニュースに対し、日本人的目線でヴェトナム現地に入り込んでいった取材は、日本のヴェトナム報道「初期」に目立ったような劇的「スクープ」ではなく、見方や視点を変えることで人々の影響をもたらす傾向にあった。例えば、本多が政治家や兵士ではなく一般の「民衆」の言葉や毎日の日常生活をつぶさに観察するといった報道のスタイルがオーディエンスに支持された。また、石川の写真も、初期に目立った先頭の決定的瞬間を収めたシーンよりは、「民衆」の生活や素顔に迫ろうとする傾向を持ったものだったのである。ヴェトナム戦争中期の報道の分析から以上のような特性が明らかになった。

平成 23 年は、ヴェトナム戦争後期に報道を行ったジャーナリストとして古森義久、近藤紘一等のヴェトナム報道を中心に分析した。その際、彼らのヴェトナム戦争観だけでなく、なぜそのように認識するに至ったかの経緯を、実際の戦況と彼らの個人的経歴、戦争体験、所属メディア、取材時期・場所などの諸事項から分析し、他の時期の論者との比較、同時期の論者との比較を行った。

古森や近藤は南ヴェトナムに行った際にサイゴンの人々が必ずしも解放戦線支持ではないことに驚き、日本の報道から得ていた印象とのギャップに憤慨した。そして前世代の特派員たちを批判し、彼等とは逆の方向へと指向する報道を行ったのであった。実際は前世代の報道では彼らが「驚いた」ようなことも報道されていたのであるが、解放戦線寄りの世論の中では主流とならず、結果、後期のジャーナリストたちは日本で得ていたヴェトナム戦争観を否定する方向で報道を行っていったのであった。

以上の検証から、第 1 にヴェトナム戦争期間中におけるジャーナリストのヴェトナム戦争観の変遷を明らかにした。第 2 に、彼らのヴェトナム戦争観の形成は、現地で何を見たかや個人的背景のみならず、それ以前に日本の報道から形成された戦争観が大きく左右していることを検証した。

本研究の成果により、日本現代史にとってのヴェトナム戦争の一側面を明らかにし、また、60 年代後半のラディカリズムの勃興および凋落が、どのような形で日本人のヴェトナム戦争観と連関しているかを提示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 著者名：岩間優希他、論題：知のアリーナⅠ　題名のないシンポジオン　加藤秀俊―語りつくすための序曲、雑誌名：アリーナ、査読：無、巻：12、発行年：2011、ページ：11－40

② 著者名：岩間優希他、論題：知のアリーナⅡ　知識と社会について、雑誌名：アリーナ、査読：無、巻：12、発行年：2011、ページ：41－68

③ 著者名：岩間優希他、論題：知のアリーナⅢ　時間と文化について、雑誌名：アリーナ、査読：無、巻：12、発行年：2011、ページ：69－103

④ 著者名：岩間優希、論題：再読・小田実『何でも見てやろう』、雑誌名：アリーナ、査読：無、巻：9、発行年：2010、ページ：379－382

⑤ 著者名：岩間優希、論題：「海を見ていたジョニー」の視線の彼方、雑誌名：アリーナ、査読：無、巻：10、発行年：2010、ページ：430－433

〔学会発表〕（計 4 件）

① 発表者名：岩間優希、発表標題：日本におけるヴェトナム戦争報道の特徴と展開、学会名等：20 世紀メディア研究会、発表年月日：2011 年 5 月 28 日、発表場所：早稲田大学（東京都）

② 発表者名：岩間優希、発表標題：ヴェトナム戦争と日本のジャーナリズム、学会名等：NHK 放送文化研究所 2011 年春の研究発表とシンポジウム、発表年月日：2011 年 5 月 19 日、発表場所：NHK 放送博物館（東京都）

③ 発表者名：岩間優希、発表標題：日本のジャーナリズムにおけるヴェトナム報道の初期報道、学会名等：日本マスコミュニケーション学会、発表年月日：2010 年 10 月 30 日、発表場所：東京国際大学（東京都）

④ 発表者名：岩間優希、発表標題：戦後日本の国際報道からの問題提起、学会名等：加藤秀俊――語りつくすための序曲、発表年月日：2010 年 10 月 27 日、発表場所：中部大学（愛知県）

〔図書〕（計 3 件）

① 著者名：野上元・福間良明編、出版社名：創元社、書名：戦争社会学ブックガイド、発行年 2012 年、総ページ数：316

② 著者名：岩間優希他、出版社名：風媒社、書名：学問の森へ――若き探究者による誘い、発行年：2011、総ページ数：204

③ 著者名：岩間優希他、出版社名：風媒社、書名：伽藍が赤かったとき―1970 年代を考える、発行年：2011、総ページ数：167

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
岩間　優希（Iwama Yuki）
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：00584096